

# 「高齢女性の社会的支援ネットワーク特性と精神的健康」 の基礎分析（その2）

野邊 政雄・田中 宏二・兵藤 好美\*

## 目 次

- 1 本報告書の目的
- 2 研究目的と研究枠組み
- 3 調査地と調査対象者
- 4 調査方法
- 5 単純集計表  
(以上前号)
- 6 主要な知見  
(以上本号)

## 6 主要な知見

以上の単純集計表から読み取ることのできる、筆者らにとって興味深い知見を5点挙げておく。

第1に、回答者の岡山市への流入過程を検討する。調査結果によると、35.3%の回答者は岡山市で出生し（問1）、41.7%は10代をその都市で過ごした（問5）。そして、71.7%の回答者の前住地は岡山市であった（問6）。さらに、出生地、10代を過ごした場所及び前住地が岡山市以外であっても、大部分は岡山県内であった。これらから、岡山市といった地方都市の住民はその都市出身者が多く、その都市への流入者も日本全国から集まってきたのではなく、その都市の後背地（近距離圏）から主に流入したといえる。

第2に、町内会、婦人会、老人会などの地域集団への参加を吟味する。まず、日本の都市の特徴として、町内会（あるいは、自治会、部落会、組合などと呼ばれる地域集団）へ加入する世帯の割合が高く、そうした半強制的ないし自動的な地域集団への参加が集団参加の中心をなしていることが指摘されてきた（鈴木 1976）。この特徴は、岡山市の高齢女性を対象に行った本調査でも当てはまる。この調査の回答者の95.1%が積極的であれ、消極的であれ町内会に加入していた（問8）。さて、町内会は多くの機能を果たし、その機能が包括的であると言われている（中村 1964）。岡山市の調査では、町内会、婦人会、老人会といった地域集団が主催する各種の活動への参加を尋ねた（問10）。参加率の高い活動は、清掃(51.2%)、募金の協力(50.9%)、慶弔の世話(37.5%)、運動・レクリエーション・旅行(36.7%)、盆踊り・祭り(31.1%)、総会に出席(31.1%)、空き缶拾い(24.7%)、空き缶・空き瓶回収(22.6%)であった。このことから、町内会をはじめとする地域集団が

---

\* 岡山大学大学院教育学研究科

多機能的であると共に、かなりの高齢女性がそうした各種の活動に参加していることが分かる。以上の結果を要約すれば、岡山市の高齢女性は、半強制的ないし自動的な町内会に加入し、町内会、婦人会、老人会といった地域集団が主催する広範な活動に参加し、地域社会の住民との共同・協力にも積極的であるということになる。

第3に、町内会以外の集団への参加を検討する。加入率の高い集団は、婦人会(30.7%)、趣味の会・スポーツ団体(26.5%)、生協(18.7%)、愛育委員会(12.4%)であった(問11)。半強制的ないし自動的な地域集団である婦人会が挙げられているものの、任意加入性が強く、自らの興味・関心・利害を実現するための集団である趣味の会・スポーツ団体にも比較的高い割合の回答者が加入していることは注目に値する。また、趣味の会・スポーツ団体での活動が比較的盛んであることは、公民館やカルチャー・センターでの活動に過去1年以内に参加した回答者が37.1%にのぼることによっても裏付けることができる(問12)。

このような集団加入の実態は、つぎのように要約できよう。岡山市の高齢女性のほとんどは町内会を筆頭とする半強制的ないし自動的な地域集団に加入していたから、そうした集団への参加が集団参加の中心をなしているといえる。同時に、自己実現のために任意に加入する趣味の会・スポーツ団体への加入率が比較的高いことにも着目すべきであろう。

第4に、回答者の社会的ネットワークを検討する。問30から問37によって、1人の回答者は平均5.68人と同居する家族以外に社会関係を取り結んでいることが明らかになった。それらの質問文の後に示した〔問柄×居住地〕の表より、相手の問柄別の平均人数を多いものから少ないものへ並べると、(1)親族、(2)友人、(3)近隣者、(4)職場仲間(同僚・上司)の順である。そして、1人の回答者には平均して、親族が2.25人、友人が1.51人、近隣者が0.87人、職場仲間が0.22人いた。この中で、親族の人数の多さが際立っている。また、社会関係を取り結ぶ相手の居住地別の人数を同じように多いものから少ないものへ並べると、(1)岡山市内、(2)地域社会(本稿では、歩いて15分以内の地域をこのように呼んでおく)、(3)(岡山市内を除いた)岡山県内、(4)岡山県外である。そして、1人の回答者は平均して、岡山市内には2.36人、地域社会には1.45人、岡山県内には0.53人、岡山県外には0.50人の人々と社会関係を組織していた。これらの数値を検討すると、岡山県内で組織されている社会関係数と岡山県外にまで延びている社会関係数は相対的に少なく、ほとんどの社会関係は、岡山市内(家族外の世界の総数の48.9%)か地域社会で組織されている(家族外の世界の総数の29.9%)ことが分かる。そして、地域社会内でも1.45人の社会関係が組織されているから、地域社会の社会的連帯が完全に崩壊したとはいえない。このことは、上述した半強制的ないし自動的な地域集団への加入率の高さやそうした集団が主催する各種の活動への参加率の高さによっても傍証できる。

第5には、高齢女性の生活ストレッサー、精神的健康度など生活適応についてである。生活ストレッサー(問18)は、家族の病気や死、失業など家庭の内外における大きな生活出来事(life events)の有無と認知的重大さを得点化したものである。生活ストレッサー得点のレンジは、0-60点であるが、全標本の平均は3.47(標準偏差、4.09)であり、一般的に生活ストレス度は低い。生起率の比較的高い出来事は、家族の病気・けが(36.4%)、家族・近親の死(35.0%)、大きな出費(15.5%)である。

次に、精神的健康度(問22)を見たい。この得点が高いほど精神的に不健康であることを示す。平均点で見るとうつ状態得点が最も低く(1.47)、社会的活動障害得点が最も高い(9.95)。身体的症状得点(6.85)と不安・不眠得点(5.05)はその中間であった。そして、これらの得点の合計である精神的健康得点は23.33であった。

第6に、前述のように、筆者ら(野邊・田中 1994)は平成5年に岡山市において60歳未満の既婚女性を対象に同じような調査を行った。この「既婚女性調査」の結果との比較

を行っておく。

「既婚女性調査」の回答者の94.2%が町内会に加入していたから、両調査の回答者は町内会への加入率で差はない。また、「既婚女性調査」の回答者の盆踊り・祭りへの参加率（44.2%）が高齢女性のその割合よりも高いことを除けば、両調査の回答者は町内会、婦人会、老人会といった地域集団が主催する各種の活動への参加率で顕著な違いはない。次に、町内会以外の集団への加入率を比べる。「既婚女性調査」の回答者の45.0%が生協に加入していたから、高齢女性は生協にあまり加入していないことになる。だが、その他の集団への加入率では、両調査の回答者はそれほど違いはない。以上のように、高齢女性はより年齢の若い既婚女性と集団加入や各種の活動への参加であまり違いはなかった。

ところが、両調査の回答者は社会的ネットワークでは違いが見られる。「既婚女性調査」の回答者には平均して、親族が2.20人、友人が2.29人、近隣者が0.95人、職場仲間が0.59人いた。これらの値を高齢女性の対応する値と比べると、高齢女性は友人関係（1.15人）と職場仲間関係（0.22人）を縮減させていることが分かる。ただ、社会的ネットワークの地理的分布が岡山市内に集中するという高齢女性の特徴は、「既婚女性調査」の回答者にも当てはまる。

生活ストレス、精神的健康度など生活適応についても比較しておく。「既婚女性調査」では、回答者の生活ストレスの平均は4.42（標準偏差、4.52）であったから、高齢女性（平均：3.47、標準偏差：4.09）は生活ストレスが有意に低いことになる（ $t=2.81$ ,  $p<.01$ ）。また、「既婚女性調査」における精神的健康度得点の平均を見ると、うつ状態得点が1.66、社会的活動障害得点が9.93、身体的症状得点6.79、不安・不眠得点5.70であった。そして、これらの得点の合計である精神的健康得点は24.09であった。これらの得点が高齢女性の対応する得点と比べると、不安・不眠得点においてのみ高齢女性（平均：5.05、標準偏差：3.85）は、年齢の若い既婚女性よりも有意に低く、精神的に健康であることが分かる（ $t=2.06$ ,  $p<.05$ ）。以上を要約すると、高齢女性は年齢の若い既婚女性よりもストレスを引き起こすような重大な生活出来事を経験しておらず、精神的により健康であるということになる。

## 謝 辞

調査票作成のために実施したプリ・テストでは、津島東の北公民館を利用する高齢女性の方々に有益な助言をいただき、調査票の質問を改善することができた。また、岡山市の283名にのぼる女性が貴重な時間を割いてこの調査に快く応じてくれた。これらのお世話になった方々に感謝します。

次に、調査員の監督と調査のための事務を行ったのは、平成6年度の社会学研究室の大学院学生と社会心理学研究室の学部3年生であった。そして、回答者の家を訪問し、面接調査を行ってくれたのは、社会学研究室の学部3年生と田中が担当する「社会心理学概論」の受講学生であった。これらの学生の努力に感謝したい。

## (注)

- (1) それぞれの要素を尋ねる質問をどのように作成したかと、調査地区の詳細については野邊・田中(1994)の「補論」を参照。

## 引用文献

中村八朗 1964 「三鷹市の住民組織——近郊都市化に伴うその変質、近郊都市の変貌過程——」,

野邊 政雄・田中 宏二・兵藤 好美

- 『三鷹市総合調査報告』，I C U社会科学研究所，99-178頁．
- 野邊政雄・田中宏二 1994 「主婦の社会的支援ネットワーク特性と精神的健康の基礎分析」『岡山大学教育学部研究集録』，第96号，133-152頁，第97号，133-142頁．
- 鈴木 広 1976 「都市社会構造論序説」，九州大学社会学研究会（編），『現代社会学の成果と課題』，70-85頁．

(平成8年7月4日受理)